

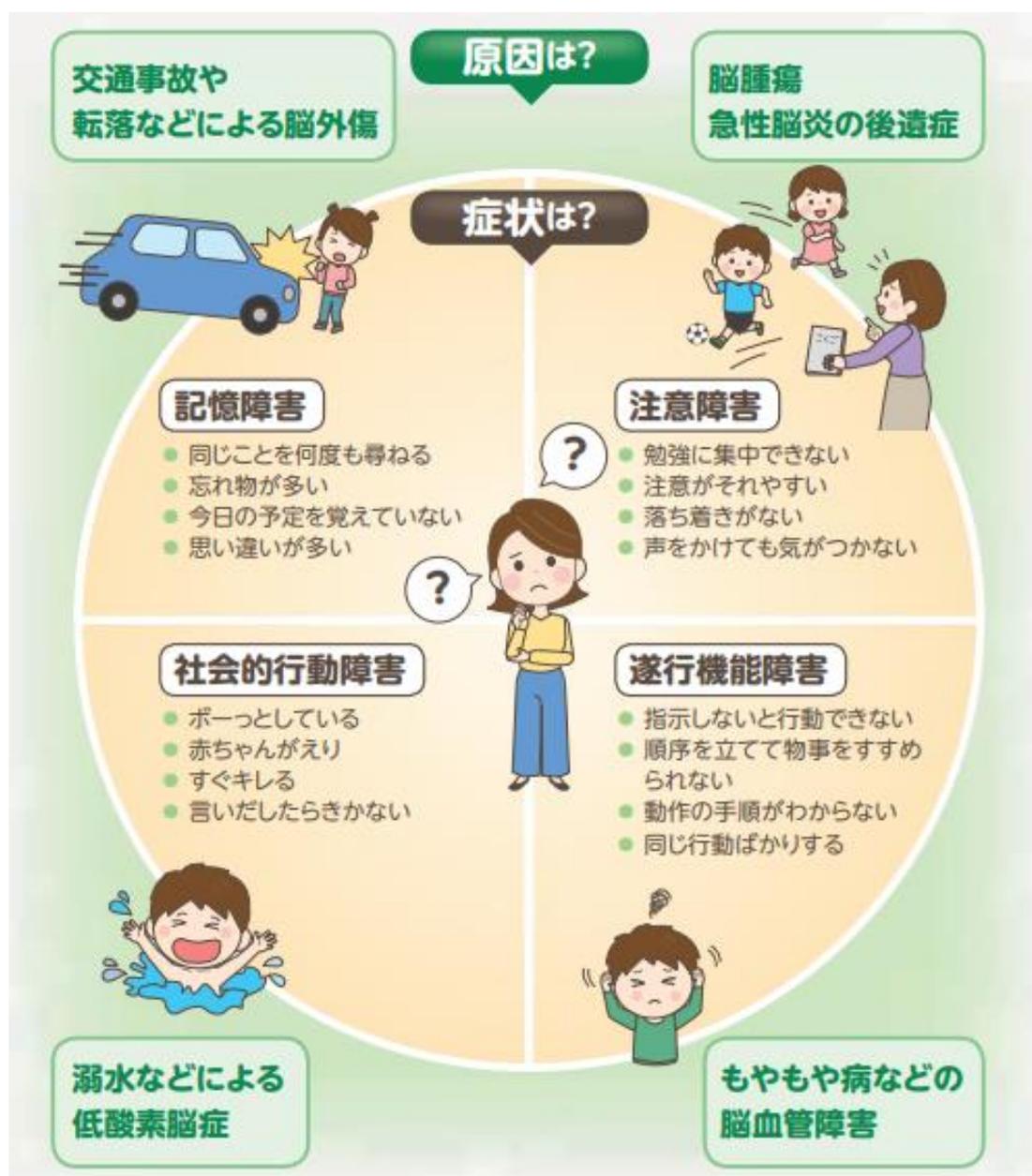
第4章 子どもの高次脳機能障害

1 はじめに

子どもの高次脳機能障害については、原因として脳外傷が多く、運動障害の保有率が低いため、成人に比べて症状が見えにくくなっています。さらに、学齢期においては病院からの移行先が学校という支援者（教員）が元々いる環境であることと、なるべく早期の復学が望ましいという周囲の思いから、受傷から退院までの時間が短くなってしまいう傾向があります。

そのため、退院と復学が適切に進むように、本人を含めて家族や支援者が事前の準備をし、連携する必要があります。

2 原因と症状



引用：『富山県高次脳機能障害ハンドブック第3版（改訂版）』より

3 子どもの高次脳機能障害の特徴

症状は大人の場合と共通する点は多いのですが、子どもの脳はまだ発達途上にあるため、次のような特徴がみられます。

- ・受傷した年齢や原因によって、状態像が異なる。
- ・就学後、障害が目立ってくることが多い。
- ・発達に伴い症状が変化する。
- ・脳が発達途中であるため、症状が変化・改善する可能性が高い。
- ・環境によって症状が変化する。
- ・二次障害（抑うつ、幻聴・妄想など）の予防が欠かせない。
- ・年月が経つと受傷の記憶が薄れ、ますます周囲から理解されにくくなってしまう。

4 復学に当たって必要なこと

受傷後、入院している子どもたちは短期間で退院し、家庭や学校に戻っていきます。

しかし、学校での生活は、時間割に沿った集団行動、クラス替え、進学など、目まぐるしく変化し、こういった環境変化に適応しなければなりません。そのため、病院から退院し復学する過程においては、子どもを、家庭、学校、医療及び福祉が連携して支えていくことが重要なポイントになってきます。

(1) 支援の例

- ①支援者は、保護者のとらえている子どもの様子に近い将来の方針を尋ね、併せて病院と学校から情報収集することの同意を得ます。



- ②病院から情報を得ます。

病院から得られる情報（現在の医療状況、障害像、リハビリの状況など）は家庭や学校へ戻るための基礎になります。



- ③学校関係者から受傷前の子どもの学校での様子を聞きます。

保護者とは違った観点から障害を把握するために必要な情報となります。



- ④以上の情報を保護者と学校関係者と医療、福祉関係者が共有し、今後の家庭生活や学校生活についての方針を検討します。

※可能であれば、病院と学校関係者の情報交換会を設定します。

病院のスタッフから情報を直接聴き、わからない点について質問することは家庭や学校での対応法を考えるために有効です。

- point 保護者や学校関係者がストレスを減らすために心がけておくこと
- 病気の知識や予後について正確に知っておく
 - 本人の障害を正しく把握する
 - 適切な目標を定める
 - 身体の回復を全ての機能回復だと思わない
 - 昔できていたことが再びできるようになっても、全てが回復したと思わない
 - 何がその行動を引き起こすか把握する
 - 失敗した時に本人を責めない

5 子どもの高次脳機能障害の支援ガイド

以下に紹介する資料(1)～(2)は高次脳機能障害の子どもの支援における情報がまとめられているものです。

(1) 「小児の高次脳機能障害 支援ガイドブック チェックリスト付」

神奈川県立秦野養護学校 かもめ学級

<https://www.pen-kanagawa.ed.jp/hadano-sh/bumon/documents/kouzinooukinousyougaidobukku.pdf>

実態把握をするためのチェックリストと対応策や事例が盛り込まれたものです。チェックリストは、行動の原因として考えられる症状・障害を確認することができます。そして、各症状の解説ページでは、なぜその行動が起きたのかを考えることができ、有効な対応策を検討しやすくなっています。



(2) 「こどもの高次脳機能障害支援ガイド」

千葉県千葉リハビリテーションセンター

<https://www.chiba-reha.jp/media/20220909.pdf>

受傷・発症した年齢による障害の気づき方の違いや支援のポイント、具体的対応方法などについてまとめられています。対応方法については、家族や特別支援学校の教員の方々が関わった具体例が掲載され、子どもたちに関わる際のヒントがたくさん詰まっていますので、活用しやすくなっています。



6 参考資料・参考文献

- ・「病気の児童生徒への特別支援教育 病気の子どもの理解のために

—高次脳機能障害— 全国特別支援学校病弱教育校長会

https://zentokucho.jp/files/zentokucyo20/h25kouji_nou.pdf

学校関係者の方々を主な対象とした冊子です。内容としては、Ⅰ 病気の理解について、Ⅱ 高次脳機能障害の子どもの理解について(小・中学校用)について掲載されています。

また、特別支援教育について、文部科学省教育支援資料「病弱」の項に「高次脳機能障害」が初めて明記されました。(2013年)



- ・栗原まな 『小児の高次脳機能障害』, 診断と治療社, 2008年
- ・栗原まな 『わかりやすい小児の高次脳機能障害対応マニュアル』, 診断と治療社, 2009年
- ・栗原まな 『写真と症例でわかる小児の高次脳機能障害リハビリテーション実践ガイドブック』, 診断と治療社, 2011年
- ・栗原まな 『よくわかる 子どもの高次脳機能障害』, クリエイツかもがわ, 2012年
- ・The Ontario Brain Injury Association 『子どもたちの高次脳機能障害—理解と対応』, 三輪書店, 2010年
- ・橋本圭司 『なるほど高次脳機能障害—誰にもおきる見えない障害 (ウィズシリーズ)』, クリエイツかもがわ, 2013年
- ・阿部順子、蒲澤秀洋 『50 シーンイラストでわかる 高次脳機能障害「解体新書」』, メディカ出版, 2011年
- ・太田令子 『わかってくれるかな、子どもの高次脳機能障害 発達からみた支援』, クリエイツかもがわ, 2014年